

列島
2011

津軽海峡 エコの街

トンネル湧水発電・竜飛崎に3セク風車



積雪や凍結防止の水が噴き出す路面(青森県外ヶ浜町の町道で)

青森・外ヶ浜町

竜飛崎や町営キャンプ場に通じる急な坂道。あたりの雪景色と違って変わり、路面は融雪用の水が流れ、黒いアスファルトが現れている。水を送るポンプの電源は水力発電。毎分8トンの青函トンネルの湧水が、キャンプ場にある水車を勢いよく回す。

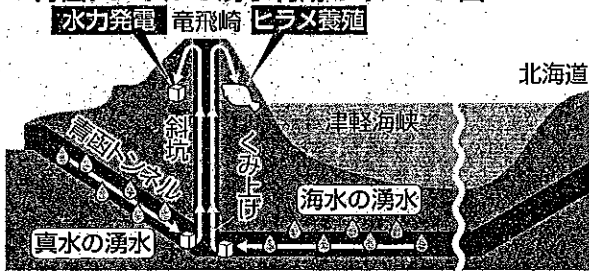
津軽半島の先端にある青森県外ヶ浜町。青函トンネルにしみ出す湧水を水力発電に使い、道路の雪を解かず取り組みがこの冬始まった。竜飛崎の強風を逆手にとった風力発電も2月から始め、「自然エネルギーの最新地」を目指す。(青森支局 佐藤純、沼尻知子)

よく回す。

JR北海道が本州側の地下320メートルからくみ上げる。湧水は10年以上前からヒラメ養殖に利用されてきた。海底付近の湧水は天候で温度が変わることなく、養殖にうってつけ。だが、利用されてきたのは海底部分のトンネルにしみ出す海水だけで、陸地部分にしみ出す真水は捨てられてきた。そこに町が目をつけた。「コストも比較的からからない。何より環境に優しい」。町新エネルギー対策室の平井恵治総括班長(47)は胸を張る。真水はもともと捨てるだけだったため、くみ上げ費はJRが負担す

青函トンネル 全長53.9キロで、本州と北海道を結ぶ海底トンネル。本州側のトンネルの出入り口は青森県今別町にあり、外ヶ浜町の地中を通過して津軽海峡の海底に入る。トンネルにしみ出る水は本州側だけで毎分約20トンに上る。

青函トンネルの湧水利用のイメージ図



る。直径30センチとコンパクトな水車が、一般家庭約50世帯の使用量に相当する電力を生み出す。夏場はキャンプ場の電力を賄う。「トンネルの水が生活に役立つような水に変わるとは想像もしなかった」。灯台近くの土産店で働く田中和行さん(39)は喜ぶ。

「風の岬」の異名で知られる竜飛崎。町が出資する第3セクター「津軽半島エコエネ」が風車2基を建設

し、2月からの発電開始を目指す。利益が出れば、町に還元する計画だ。近くに住む漁師の嶋崎春寿さん(75)は「厄介者だった風が、町に恵みを運んでくれる」と期待する。

町によると、青森県内に200基の風車があるが、9割近くは県外企業が所有。売電用の発電は県内では初めてとなる。エコエネ常務の田中健治さん(64)は「風車があちこちにあっても、これまで恩恵は固定資産税程度。地元の風は地元で使いたかった」と話す。森内勇町長(72)は「風や水はいまや町の資源。地球環境に優しいエネルギーへの関心を高め、自然エネルギーの町として全国にPRしたい」と意気込んでいる。